（翻訳）朝鮮半島東海岸地域青銅器時代墳墓の変遷

朴　栄九*
訳：平郡達哉**

The Tombs of changes in the Bronze Age in the eastern coast area of the korean peninsula

Young-koo Park
（Translated by Tatsuya HIRAGORI）

キーワード：朝鮮半島東海岸地域、青銅器時代、支石墓、石棺・石槨墓、土壙墓、周溝墓

Ⅰ．序言

支石墓を中心にした朝鮮半島青銅器時代の墳墓に対する研究は、地域毎の墳墓の型式分類及び出土遺物の分析を基に編年と地域的な変化を主なテーマとして進められ、近年では各地域で調査された遺構と出土遺物を中心に社会の位階化と社会集団の性格と組織を解明しようとする努力が行なわれている（金承玉 2006、裵眞晟 2006）。さらには一定景観内における支石墓の築造が持つ象徴的な意味と支石墓の存在による意味作用についても解釈が試みられている（李盛周 1999、金鐘一 2004）。

2000 年代になると朝鮮半島東海岸地域（江原道嶺西地域含む）では青銅器時代の墳墓として支石墓以外に石棺墓、周溝墓、石槨墓、土壙墓に分類される墳墓が調査され、青銅器時代墳墓の多様性に対する論議が本格化した。しかし、調査された墳墓の中には後代の毀損が激しく構造を充分に把握できないものも多く、また古い時期の調査は調査水準の問題から正確な遺構の内容を把握できるものが少ないため、研究の進展に困難をもたらしている状況である。江原道地域の支石墓及びその他の墳墓に対する最近の集成とその性格に対する分析的な研究としては高東淳（1999）、鄭然雨（2005）、金権中（2007）、金圭鎬（2010）の作業がある。これらの研究は新たな解釈の試みというよりは江原道地域の墳墓資料に対する総整理作業に意味を置いており、一連の支石墓集成作業と内容上の重複が多い。

本稿の研究対象地域である朝鮮半島東海岸地域は江原道嶺東地域を中部東海岸地域に、慶尚北道蔚珍郡－浦項市－慶州市－蔚山広域市に至る地域を南部東海岸地域(1)に区分できる。朝鮮半島南部地域の無文土器文化の展開過程において東海岸地域は文化の伝播及び移動経路上(2)重要な位置を占めている。東海岸地

＊江陵原州大学校博物館
＊＊島根大学法文学部社会文化学科

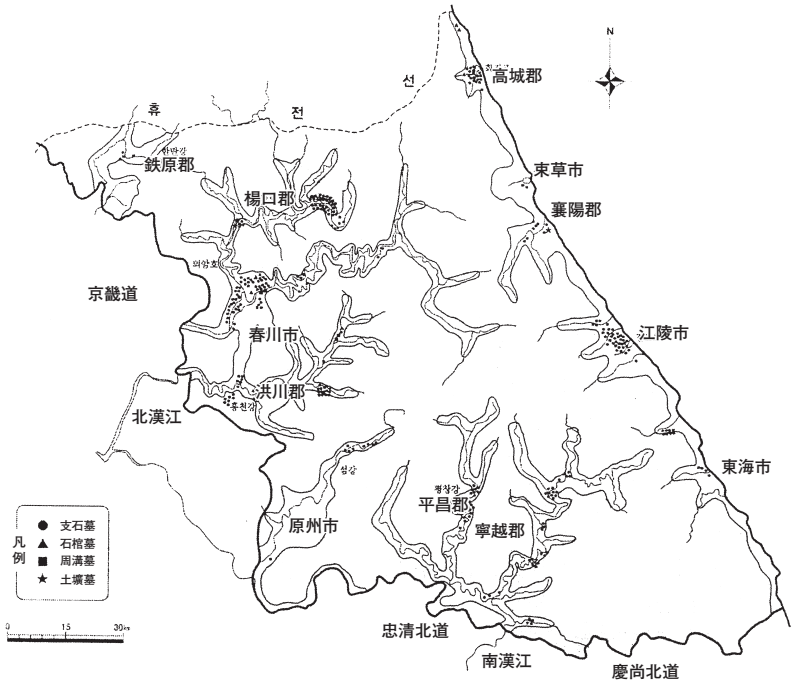


図 1．江原地域における青銅器時代墳墓の分布

域の無文土器の要素には西北・東北地域の文化要素が共伴する様相が見られ、青銅器時代の遺跡は河川と海が合水する地域と湖岸の丘陵地帯に位置しており海岸線に沿って拡散・定着したことが分かる。嶺東地域と蔚珍ー浦項ー慶州ー蔚山をつなぐ南部東海岸地域の無文土器の編年も複合文様から単独文様に変わるという大きな流れは同様である。

東海岸地域の青銅器時代墳墓研究において嶺東地域は江原地域青銅器時代墳墓研究の対象地域として扱われてきた（金権中 2007、金圭鎬 2010）。蔚山地域に対する青銅器時代墳墓については研究が進んでおり（李秀鴻 2007・2010、黄昌漢 2010）、本稿の南部東海岸地域にあたる検丹里類型の墳墓に対する論考が発表されている（李秀鴻 2011）。

本稿での筆者の東海岸地域青銅器時代編年案（朴栄九 2009 を一部修正）は以下のとおりである。早期（刻目突帯文土器出土遺跡、江陵校洞）ー前期（前期前葉、前期中葉、前期後葉）ー検丹里段階を中期[3]（前半、後半）ー円形粘土帯段階を後期に編年する。

本稿では江原道嶺東地域と調査資料が増加している検丹里文化圏（李秀鴻 2010）の範疇に含まれる盈徳、浦項、慶州、蔚山地域の南部東海岸地域を対象にして青銅器時代墳墓の変遷様相について検討してみよう。

Ⅱ．青銅器時代墳墓の立地と分布現況

東海岸地域における青銅器時代墳墓の立地は大部分が低い丘陵に位置するほか、慶州地域の兄山江流域の沖積台地で一部墓制が確認されており、集落の立地傾向と大同小異な様相を見せている。嶺東地域先史遺跡の立地条件を見ると、新石器時代と鉄器時代の遺跡は海岸近くの潟湖と丘陵に位置するという違いを見せている（朴栄九 2007）。

浦項地域では現在の草谷川周辺地域の丘陵

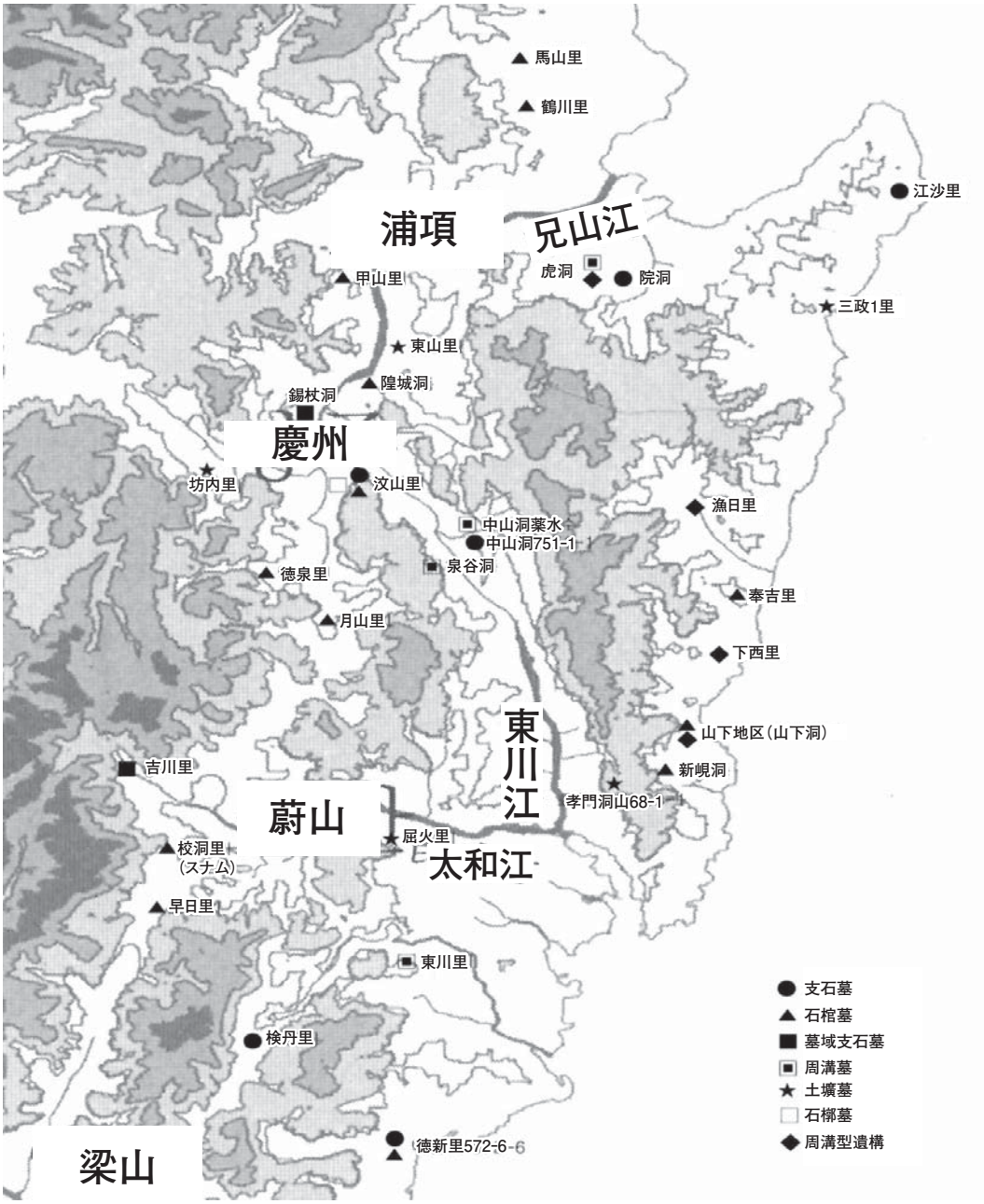


図 2.　南部東海岸地域における青銅器時代墳墓の分布

性立地類型、冷川周辺地域の丘陵地域と沖積台地に位置する河川性立地類型、三政里遺跡など現在の九竜浦地域の東海岸に隣接した海岸性立地類型に区分できる（朴栄九 2009）。慶州地域は兄山江と西川、北川、南川の氾濫によって形成された平地型[4]と丘陵地形に立地する（孫ホソン・チョンサンウック 2010）。一方、蔚山地域は太和江、東川周辺の丘陵で多数の青銅器時代集落が調査されており、最近では東海岸に隣接する江東地域でも青銅器時

代集落の調査が増加している。以上のように東海岸地域青銅器時代の墳墓の立地[5]もまた集落の立地と同じ様相を見せる。一方、嶺東地域で発見された唯一の土壙墓は松田里の砂丘地帯に位置しているがこのような立地は極めて例外的で、慶州徳泉里石棺墓と三政洞墓域支石墓は平地型である沖積台地に立地する。

嶺東地域の青銅器時代墳墓は支石墓、石棺墓、土壙墓に区分される。嶺東地域では潟湖周辺の丘陵、河川が海に流れこむ河口周辺の丘陵に青銅器時代集落が分布しており、このように集落が形成された丘陵の頂上部または山裾にやはり青銅器時代の墳墓である支石墓や石棺墓も位置している。嶺東地域では全112基の支石墓が報告されているが現在92基が残っている。これらの支石墓は大部分が花津浦、鏡浦湖など大きな潟湖に接した丘陵に密集分布しており、高城郡花津浦周辺に54基、束草朝陽洞で確認された2基、襄陽南大川周辺8基、江陵鏡浦湖隣近に46基、東海市で確認された4基など全112基になるが、東海市に分布する一部の支石墓を除いて大部分が住居址と同様に丘陵地帯に立地する。

嶺東地域で支石墓は束草朝陽洞1・2号、襄陽浦月里1・2号、高城大垈里遺跡で1基が調査されたが下部構造は全て石槨型である。石棺墓は江原文化財研究所が発掘した江陵坊内里遺跡で1基、高城松峴里B遺跡で1基、高城松峴里D遺跡で3基、高城草島里遺跡で2基、襄陽遠浦里で1基、江陵芳洞里C遺跡で2基など全10基が調査されている。土壙墓は襄陽松田里で1基が調査されている。

盈徳地域で確認された墳墓は支石墓のみであるが、南山里から2基、羽谷里212―3番地で11基が調査されている。

浦項地域で確認された墳墓は支石墓[6]、周溝墓、土壙墓、石棺墓、周溝型遺構がある。しかし、各集落で住居址と共に調査された墳墓は院洞2地区の支石墓1基、江沙里支石墓1基、虎洞の周溝墓1基、三政里の土壙墓1基、浦項虎洞Ⅱ地区の周溝型遺構であり、馬山里と鶴川里では墳墓のみが確認されている。

慶州地域では支石墓[7]、石棺墓、石槨墓、墓域支石墓が確認されている。支石墓は汶山里Ⅱナ区域で1基、石棺墓は汶山里Ⅱカ区域で4基、Ⅱナ区域で2基、Ⅲ区域で1基、甲山里で1基、月山里山137―1番地遺跡で1基、徳泉里（嶺文研）1基、奉吉里1基の11基である。石槨墓は汶山里遺跡でのみ確認されⅡカ区域から5基、Ⅲ区域で2基の7基が調査された。墓域支石墓は慶州錫杖洞876―5番地遺跡で確認されている。

蔚山地域の墳墓は住居址の数に比べ極めて少ないが埋葬主体部の構造は多様である。前期には周溝墓、土壙墓、割石石棺墓、中期には墓域支石墓と周溝型遺構、後期には大部分小型石棺墓が築造された。支石墓の場合、埋葬主体部を地上に置く囲石型石棺である。

Ⅲ．青銅器時代墳墓の型式と出土遺物

東海岸地域で確認された青銅器時代墳墓の種類は支石墓、石棺墓、石槨墓、土壙墓、周溝墓、墓域支石墓、周溝型遺構に区分される。

1. 支石墓

嶺東地域を含む江原地域の支石墓全体を対象にした型式分類[8]は鄭然雨が最初に試みた（鄭然雨 2005）。嶺東地域の支石墓の調査は数的に多くないが、嶺西地域と異なり墓域施設が確認されておらず、独立的な分布様相を見せることが特徴である。3遺跡（朝陽洞、浦月里、大垈里）で5基の支石墓が発掘調査されている。

朝陽洞1・2号支石墓は住居址が位置する丘

陵から東へ約700m離れた丘陵で調査された。石槨型の埋葬主体部から扇形銅斧と無茎式石鏃、一段茎式石鏃が出土している。

浦月里支石墓は石槨型で遺物は出土せず、住居址が立地する丘陵で住居址と約10〜20mの距離を置いて位置しており、大垈里支石墓も蓋石式で石槨型の地下式構造であり、住居址と隣接している支石墓である。遺物が出土せず住居址との時期に関する問題は不明であるが、住居址と同じ丘陵内に位置することから時期的な違いは大きくないものと思われる[9]。

盈徳地域では南山里で2基[10]、羽谷里212−3番地で支石墓11基が確認された。上石の下に数個の割石が巡る場合と埋葬施設が全く確認されない場合もある。

浦項地域では院洞2地区Ⅳ−1区域の海抜61mの丘陵頂上部で1基調査された。上石が無く蓋石がある地下式の石槨型[11]で平面形態は長方形を呈する。遺物は磨製石槍片1点が西長壁の下から出土した。江沙里支石墓は上石が耕地整理時に現在の位置に動かされた状態であった。平面形態は長方形に近く出土遺物はない。

慶州地域には369基の支石墓が分布すると報告されているが（金廣明2003）、このうち発掘調査された支石墓は坊内里5基、汶山里Ⅱナ区域支石墓である[12]。

蔚山地域では検丹里遺跡3基、中山洞715−1遺跡2基、徳新里1基、上蓮岩Ⅲ−1号で7基が調査された。蔚山地域と慶州坊内里、盈徳南山里など検丹里類型の支石墓は地上式で

表1. 東海岸地域における支石墓の調査現況

区分	積石形態	埋葬施設			埋葬主体部出土遺物	備考
		形態	床面	位置		
朝陽洞1号	無	石槨	小割石板石	地下	銅斧、無茎式石鏃	Ⅰa
朝陽洞2号	無	石槨	小割石板石	地下	無茎式・有茎式石鏃	Ⅰa
浦月里1号	無	石槨	地山	地下		Ⅰa
浦月里2号	無	石槨	割石	地下		Ⅰa
大垈里1号	無	石槨	割石、川石	地下		Ⅰa
南山里（2基）	無	囲石	川石	地上		Ⅱc
羽谷里（11基）	無	囲石	川石	地上		Ⅱc
院洞2地区Ⅳ−1区域	無	石槨	礫石、板石	地下	石槍	Ⅰa
浦項江沙里	無					?
慶州芳内里1	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
慶州芳内里2	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
慶州芳内里3	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
慶州芳内里4	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
慶州芳内里5	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
汶山里Ⅱナ	無	石槨	川石	地下		Ⅰa
検丹里1号	無	土壙				Ⅰc
検丹里2号	無	割石	割石	地下		Ⅰa
検丹里3号	無	囲石	割石	地上		Ⅰc
中山洞715−11号	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
中山洞715−2号	無	囲石	割石	地上		Ⅱc
上蓮岩Ⅲ−1	無	石槨	割石	地下	石槍、石鏃	Ⅰa
徳新里1号	無	無				?

埋葬主体部は小型の囲石型石棺の形態を見せている。このような囲石型石棺は湖南地方から伝播したものと把握されている（李秀鴻 2011）。

東海岸地域に支石墓が導入・築造された時点は他の地域と類似するものと判断される。朝鮮半島の各地域に定着した支石墓は地域ごとの発展をなしたものとみられるが、大規模区画施設と埋葬施設を有する南海岸地方の支石墓や多数の上石が群集する湖南地方の支石墓、巨大な北方式支石墓は各自の地域的発展をなした結果物と考えられる。

これに比べ江原地域を含む東海岸地域の支石墓はどの側面においても印象的な規模で発展することができず他地域でのように粘土帯土器段階まで存続したのち消滅してしまったものと理解される（李盛周・朴栄九 2009）。

本稿では支石墓を埋葬主体部の位置によって地下型（Ⅰ型）、地上型（Ⅱ型）に区分し、埋葬主体部の構造によって石槨型（a 型）、石棺型（b 型）、囲石型（c 型）に分類した。東海岸地域では積石は確認されていないため分類基準からは除外した。

2. 石棺墓

東海岸地域で調査された石棺墓は計 40 基である。石棺墓の分布は嶺東地域の場合、大部分 1～3 基ほどの小規模で独立的分布を見せており、嶺西地域は支石墓周辺に混在したりさほど遠くない隣近に共存する形で分布している。

嶺東地域では江陵坊内里遺跡（江原文化財研究所発掘）で 1 基、高城松峴里 B 遺跡で 1 基、松峴里 D 遺跡で 3 基、高城草島里遺跡で 2 基、襄陽遠浦里で 1 基、江陵芳洞里 C 遺跡で 2 基など計 10 基が調査されている。

浦項地域では馬山里で 1 基、鶴川里で 5 基が調査されている。馬山里石棺墓（慶尚北道文化財研究院 2005）の平面形態は長方形で平面比は 2.2：1 である。遺物は石剣 1 点、三角湾入石鏃 1 点が出土した。

慶州地域では汶山里Ⅱカ区域で 4 基、Ⅱナ区域で 2 基、Ⅲ区域で 1 基、甲山里で 1 基、月山里山 137－1 番地遺跡で 1 基、徳泉里（嶺文研）1 基、皇城洞 537－2 番地 1 基、奉吉里 1 基など計 12 基である。

蔚山地域の石棺墓は早日里遺跡 72 号、校洞里スナム遺跡の割石石棺墓で赤色磨研土器と二段柄式石剣、一段茎式石鏃が出土し、徳新里石棺墓では一段柄式石剣が出土した。山下洞遺跡では 4 基の石棺墓が調査されたが、2－1 号と 2－2 号は墓域施設を有しており、区画された敷石の下から 2 基が調査された。蔚州徳新里 572－6 番地石棺墓（5 基）は 1 枚ある

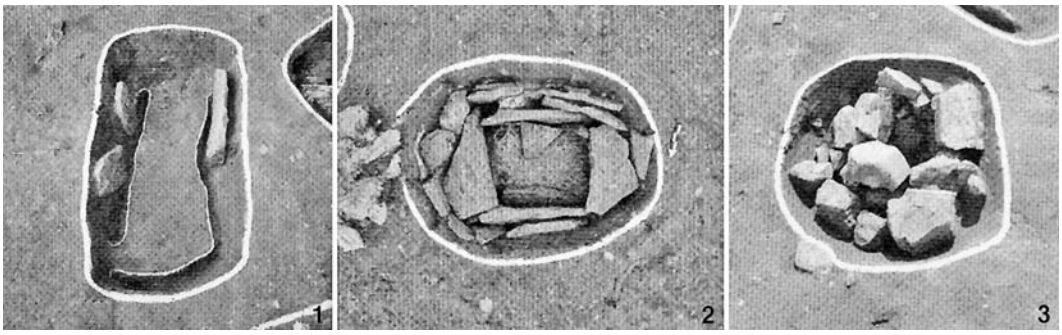


写真 1. 蔚州徳新里 572－6 番地遺跡 3 号墓（1）、5 号墓（2）、1 号ソッテ関連遺構（3）

表 2. 東海岸地域における石棺墓の調査現況

遺跡名	規模(cm)	形態	蓋石	壁石	床面	出土遺物（数）	墓壙充填	形態
坊内里（江文）	140×40×40	凵字形	板石 4	板石	板石	台付小壺	粘土	Ⅰ Aa
芳洞里 C－1	85×47×34	凵字形	板石 1	板石形割石	板石		粘土	Ⅱ Aa
芳洞里 C－2	130×40×45	凵字形		割石造	割石		粘土	Ⅱ Aa
松峴里 B－1	125×55×45	凵字形		板石形割石	地山	無茎式石鏃 2	割石	Ⅱ Cb
松峴里 D－1	48×15×20	凵字形	板石 2	板石各 1	割石		割石	Ⅰ Cb
松峴里 D－2	48×23×23	凵字形	板石 1	板石各 1	割石	粘土帯土器片	割石	Ⅰ Cb
松峴里 3	(71×52×18)	凵字形		板石各 1	板石		粘土	Ⅰ Aa
草島里 1	134×67	凵字形		割石造	割石		粘土	Ⅱ Ca
草島里 2	114×85	凵字形		割石造	割石		粘土	Ⅱ Ca
遠浦里	135×70×34	凵字形		板石各 1	地山		粘土	Ⅰ Ca
浦項馬山里	122×55×17	凵字形		板石 2	粘土	石剣、三角湾入鏃	割石＋粘土	Ⅰ Cc
鶴川里 1 号	154×39×45	凵字形		板石	板石		割石＋粘土	Ⅰ Aa
鶴川里 2 号	120×33×45	凵字形	板石 4	板石	地山		割石＋粘土	Ⅰ Ca
鶴川里 3 号	130×30×45	凵字形	板石 2	板石	割石		割石＋粘土	Ⅰ Ba
鶴川里 4 号	129×42×45	凵字形	板石	板石	割石	剣把頭飾、石槍	割石＋粘土	Ⅰ Bc
鶴川里 5 号	135×30×45	凵字形	板石	板石	地山	剣把頭飾	粘土	Ⅰ Ca
慶州汶山里Ⅱカ 1 号	104×68×37	凵字形	板石	板石 1－2	割石		粘土	Ⅰ Ba
慶州汶山里Ⅱカ 2 号	134×80×37	凵字形		割石	割石	赤色磨研土器把手	粘土	Ⅱ Ba
慶州汶山里Ⅱカ 3 号	80×48×20	凵字形		板石、割石	地山		粘土	Ⅰ Ca
慶州汶山里Ⅱカ 4 号	179×76×34	凵字形		板石	板石		割石＋粘土	Ⅰ Ac
慶州汶山里Ⅱナ 1 号	160×81×24	凵字形		板石	地山		割石＋粘土	Ⅰ Cc
慶州汶山里Ⅱナ 2 号	218×81×24			割石	地山	赤色磨研土器、三角湾入鏃 7	粘土	Ⅱ Ca
慶州甲山里 1 号	260×190×60	凵字形	板石	板石	割石		粘土	Ⅰ Ba
慶州月山里山137－1	83×25×20	凵字形		割石、川石	板石	二段柄式石剣 1、三角湾入鏃	粘土	Ⅱ Aa
慶州徳泉里	80×40×？	凵字形		板石	板石	石剣1、石鏃3、赤色磨研土器片	川石＋粘土	Ⅰ Ad
慶州隍城洞 537－2	75×37×40	凵字形		板石	川石	石鏃 6	川石＋粘土	Ⅰ Bd
慶州奉吉里	141×68×30	凵字形		割石	地山	石器	粘土	Ⅱ Ca
蔚山早日里	144×73×70	凵字形		割石	地山	二段柄式石剣、赤色磨研土器	粘土	Ⅱ Ca
蔚山校洞里スナム	170×70×78	凵字形		川石	地山	二段柄式石剣、石鏃	粘土	Ⅰ Ca
蔚山徳新里 1 号	160×100			板石	地山	一段柄式石剣	粘土	Ⅰ Ca
蔚山徳新里 2－1 号	100×67	凵字形	板石	板石	板石		粘土	Ⅰ Aa
蔚山徳新里 2－2 号	178×48	凵字形	板石	板石	板石		粘土	Ⅰ Aa
新峴洞 3 号	45×30×25	凵字形		板石	板石		粘土	Ⅰ Aa
新峴洞 6 号	45×25×20	凵字形	板石	板石	板石		粘土	Ⅰ Aa
九秀里 6 号	37×20×25	凵字形	板石	板石	板石	赤色磨研土器	粘土	Ⅰ Aa
山下洞 1	140×50×45	凵字形	板石	板石	板石	無文土器	粘土	Ⅰ Aa
山下洞 2－1	73×52×33	凵字形	板石	板石	地山		割石＋粘土	Ⅰ Cc
山下洞 2－2	77×58×29	凵字形	板石	板石	地山		粘土	Ⅰ Ca
山下洞 3	92×47×29	凵字形	板石	板石	板石		粘土	Ⅰ Aa
茶雲 436－5	110×57×８	凵字形		板石	板石		粘土	Ⅰ Aa
徳新 572－6　1	110×58×12	凵字形		板石	割石		粘土	Ⅰ Bb
徳新 572－6　2	108×64×20	凵字形		板石	板石		割石	Ⅰ Ab
徳新 572－6　3	80×60×8	凵字形	板石	板石	地山	赤色磨研土器	粘土	Ⅰ Ca
徳新 572－6　4	130×90×32	凵字形		板石	地山	孔列文土器片	粘土	Ⅰ Ca
徳新 572－6　5	130×100×10	凵字形	板石	板石	板石		割石	Ⅰ Bb

いは2枚の板石を利用して壁石を築造し、床面には小型の割石を利用したり1枚あるいは数枚の板石を利用して屍床を設けた。

以上のように石棺墓は大部分が丘陵上で住居址とともに調査され、慶州徳泉里のみ沖積台地で検出された。石棺の築造位置によって区分すれば大部分が地下式であり、平面形態を基準にすれば坊内里、芳洞里C−1・2号はロ字形で、残りはㅁ形である。大部分が板石1枚で蓋石としているが、流失している場合がさらに多く、江陵坊内里と浦項鶴川里2号は板石4枚、鶴川里4号・徳新里572−6番地5号では二重板石になっている。

石棺墓の分類基準は壁石の形態によって板石石棺墓（I式）、割石石棺墓（Ⅱ式）に大別され、床面の処理状態によって板石（A式）、川石・割石（B式）、地山（C式）に、さらに墓壙間の充填形態によって粘土（a）、割石（b）、粘土＋割石裏込め（c）、川石＋粘土裏込め（d）に区分される。

江陵坊内里出土の台付小壺は江陵校洞1号出土品と束草朝陽洞3号住居址出土品の中間形態であり、汶山里Ⅱカ−2号出土の赤色磨研土器、三角湾入無茎式石鏃7点、慶州月山里山137−1番地石棺墓出土の二段柄式1点、三角湾入石鏃17点、丸玉4点は前期中葉に編年されて、馬山里石棺墓出土三角湾入石鏃は浦項草谷里2号住居址、南松里3号住居址出土品と類似していることから前期後葉に編年されて、蔚山早日里遺跡72号、校洞里スナム遺跡の割石石棺墓は赤色磨研土器と二段柄式石剣、一段茎式石鏃が出土しており前期後葉に編年される。慶州徳泉里石棺墓出土赤色磨研土器片1点と石鏃3点（無茎式2点、一段茎式石鏃1点）、石剣の剣身片1点は嶺東地域の浦月里1号住居址出土品と同じ形態を見せており中期前半、徳新里572−6番地、徳新里石棺墓3号では新しい段階の赤色磨研土器が出土しており中期後半に編年される。

石棺墓は円形粘土帯土器段階である青銅器時代後期になると徐々に小型化し、石棺の形態も整然としなくなる。嶺東地域の松峴里B石棺墓で無茎式石鏃2点、浦項鶴川里石棺墓4号では石槍、石鑿、剣把頭飾（江陵松林里1号と類似）が出土し、5号出土剣把頭飾は高城松峴里D出土品と類似する点から円形粘土帯土器段階の墳墓と判断される。

3. 石槨墓

石槨墓[13]は慶州地域の汶山里遺跡Ⅱカ区域で5基が調査された。支石墓の下部構造である可能性と石棺墓（割石型石棺）である可能性があるが、汶山里の石棺墓と比べると墓壙の大きさに差が見られる関係で石槨墓に区分した。汶山里Ⅱカ区域の石槨墓5基は等高線と並行して築造された。Ⅱカ−1・3・5号は蓋石が残っており、壁石は大部分割石を利用して築造された。屍床は割石を敷いたり地山面をそのまま利用した。墓壙と石槨の間には割石裏込め（1号）、粘土裏込め（3−5号）、割石＋粘土裏込め（2号）を施した。

遺物はⅡ−カ3号で一段柄式石剣1点が出土しており、これが大邱上仁洞1号石槨墓出土品と類似することから青銅器時代中期後半に編年される。

4. 土壙墓

襄陽松田里遺跡で1基と浦項三政里1基、慶州坊内里1基、東山里1基、蔚山屈火里Ⅱ−2号土壙墓、蔚山孝門洞（モジュール化産業団地）2基、新泉洞2基、蔚州徳新里1基など計10基が調査された。

土壙墓の平面形態は大部分長方形で、内部に何ら施設がない形態（Ⅰ式）と床面は地山

表 3.　石棺墓調査現況

遺跡名	規模（cm）	形態	蓋石	壁石	床面	出土遺物(数)	備考
慶州汶山里Ⅱカ１号	180×200×47	長方形	板石	２枚	割石		割石裏込め
慶州汶山里Ⅱカ２号	398×392×78	長方形	板石	１枚	割石		割石＋粘土裏込め
慶州汶山里Ⅱカ３号	256×123×48	長方形		割石	割石	磨製石剣	粘土裏込め
慶州汶山里Ⅱカ４号	276×190×38	長方形		割石	割石		粘土裏込め
慶州汶山里Ⅱカ５号	224×142×58	長方形	板石	１枚	割石		粘土裏込め

面であり一部の壁を小さな割石で充填したり内部に蓋石のような割石が発見される形態（Ⅱ式）に区分される。

襄陽松田里土壙墓の平面形態は長方形で、内部には粘質含量が高い黄褐色砂が満たされており中央から若干西側に偏って完形の無茎式石鏃９点が出土した。

浦項三政里土壙墓の平面形態は隅丸長方形である。墓壙は風化岩盤層を掘削して壁をほぼ垂直に造成し、床は地山面をそのまま利用した。木棺の痕跡や他の施設物は確認されなかった。南長壁には壁石として利用した４枚の割石[14]が残っている。遺物は北長壁に接して赤色磨研長頸壺２点、中央から土製紡錘車１点が出土した。

慶州東山里土壙墓は床面にはこれといった屍床施設を設けていないが、木棺の範囲と推定される有機物の痕跡と土層上で充填土と判断される層が確認されたため木棺墓と推定される。内部では管玉１点と赤色磨研土器、紡錘車が出土した。

蔚山屈火里Ⅱ－2 号土壙墓では有樋二段柄式石剣と無茎式石鏃が出土しており前期中半に、孝門洞（モジュール化産業団地）土壙囲石墓では二段柄式石剣と一段茎式石鏃などが共伴しており前期後葉に編年される。

5. 周溝墓

周溝墓[15]は従来周溝石棺墓、周溝附石棺墓とも呼ばれてきたが、埋葬主体部の形態が典型的な石棺のみならず石槨型と木棺もあるために周溝という独特な墓域施設を強調するため「周溝墓」と呼んでいる（金権中 2008）。

周溝墓は嶺東地域では確認されておらず[16]、浦項虎洞Ⅰ地区の南側であるＣ丘陵の中央で平面細長方形のものが確認され、周溝内部からは口唇刻目短斜線土器と無文土器の底部が出土した。蔚山地域では中山洞薬水遺跡で１基、泉谷洞 117 番地遺跡で２基の長方形周溝墓と東川里遺跡では方形の周溝墓１基が調査された。

虎洞周溝墓では口唇刻目短斜線土器が出土しており、筆者の編年案である浦項地域２期である前期後葉に該当する。蔚山地域の周溝墓の場合、長方形（中山洞薬水、泉谷洞 117 番地）は前期後葉に、方形は前期後半～中期前半に編年される。他の地域と異なり蔚山地域の周溝墓は長方形から方形に変化し、埋葬主体部は土壙（木棺）の構造を持つことが他地域の周溝墓の埋葬主体部が石棺であるという事実と比べて違いを見せる（金権中 2008）。

6. 墓域支石墓[17]

慶州錫杖洞 876－5 番地多世帯住宅新築敷地内遺跡と蔚州吉川一般産業団地２次（1 段階）造成事業敷地内遺跡で円形と長方形の大型墓域支石墓が調査されている。

慶州錫杖洞 876－5 番地の墓域支石墓は区画施設として 50cm 前後の割石を積み上げ、東西方向に長さ 43m ほど確認された。墓域内部で

表 4. 土壙墓調査現況

遺跡	平面形態	規模				出土遺物	時期
		長軸	短軸	深さ	長短比		
襄陽松田里	長方形	185	70	25	2.64:1	無茎式石鏃 9 点	前期中半
浦項三政里	隅丸長方形	185	103	40	1.79:1	赤色磨研土器長頸壺 2 点	前期中半
慶州東山里	長方形	285	106	17	1.75:1	赤色磨研土器、紡錘車、管玉	中期前半
慶州坊内里	長方形	155	50	50	3.1:1	無文土器片	中期前半
蔚山新泉洞 1 号	長方形	300	180	60	1.66:1	赤色磨研土器	中期前半
蔚山新泉洞 2 号	長方形	210	60	30	3.5:1		中期前半
蔚山屈火里	長方形	175	107	40	1.63:1	有樋二段柄式石剣、無茎式石鏃	前期中半
蔚山孝門洞(嶺文研)	長方形	148	68	77	2.14:1	石鏃、石槍	前期後半
蔚山孝門洞(大東)	長方形	235	136	25	1.72:1	二段柄式石剣、石鏃	前期後半
蔚州徳新里	長方形	(90)	(66)	(12)		磨製石剣、石鏃 11	中期後半

は埋葬主体部と考えられる石棺墓 1 基が確認され、石棺内部では一段柄式石剣片 1 点が出土した。石棺墓の隣近で竪穴遺構が確認され、その内部に木炭が置かれており上部から人骨が発見されたことから火葬墓と推定されている。

蔚州吉川一般産業団地 2 次（1 段階）造成事業敷地内遺跡では墓域支石墓と積石遺構が調査された。墓域支石墓は 4 基で平面形態は長方形（1・2 号）と楕円形（3 号）に区分される。

7. 周溝形遺構

従来、蓮岩洞溝、環溝（蔚山発展研究院文化財センター 2009ー埋葬関連遺構と判断）と命名された遺構で、住居址とは無関係な火葬、洗骨葬といった二次葬の埋葬方法を採用した周溝墓と判断した李秀鴻（2010）[18]の見解のように埋葬関連遺構と判断されるが、現在まで調査された遺構からは埋葬主体部が確認されておらず周溝墓とは区分することにする。

蔚山山下地区 39 基（蔚山発展研究院文化財センター 10 基[19]、ウリ文化財研究院 20 基、蔚山文化財研究院 C 地区で 8 基）、慶州下西里で 4 基が調査された。一方、慶州漁日里 A－Ⅲ－1・2 号、B 区域（ハンビッ文化財研究院調査溝状遺構（1・2・4・8～14 号））F－1 号溝状遺構、慶州神党里（慶尚北道文化財研究院）1・2 号溝状遺構、慶州淵安里、虎洞Ⅱ地区 1・2・4 号溝状遺構も規模及び集落内での位置などを考慮すると、周溝型遺構と判断される。

平面形態は隅丸長方形、隅丸方形を呈し、住居址が丘陵斜面に分布する反面、周溝型遺構は稜線に分布し同じ丘陵において住居址よりは視覚的に高い場所に分布することが特徴である（李秀鴻 2010）。浦項Ⅱ地区の周溝型遺構は報告書では溝状遺構と把握されており、最近この溝状遺構 5 基を周溝式区画墓に分類して、別々に分散して位置し、長軸の方向性や等高線との一定した規則を持たず、住居区域と広場または多様な地形の中に立地するなど立地上の規則性がないため、この墓が連続的な企画の中で造営されたのではなく、半独立的な各集団に属したものと把握している（安在皓 2011）。

一方、山下洞 1 号周溝型遺構は 1 号住居址を破壊して築造されており、4 号では横線文、9 号では孔列文と短斜線（粒文）が出土していることから検丹里類型の中期後半にあたる時

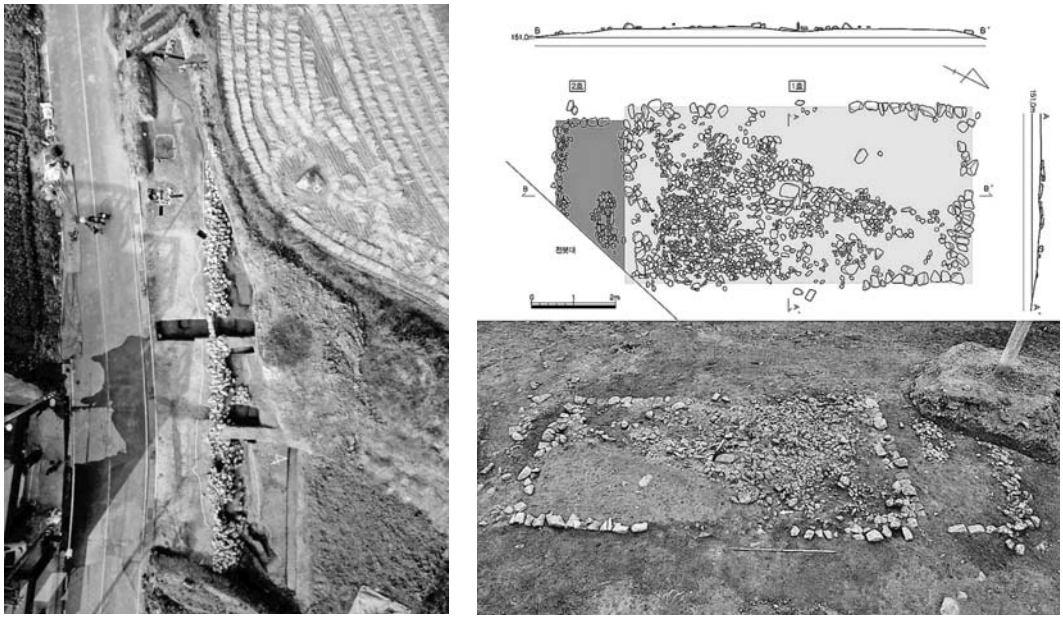


写真 2. 錫杖洞 876−5 番地遺跡墓域支石墓（蔚州吉川一般産業団地造成事業敷地内遺跡ラ地区 1・2 号墓）

写真 3. 蔚山山下洞周溝型遺構

期[20]の埋葬関連遺構である。

Ⅳ. 東海岸地域における青銅器時代墳墓の変遷様相

ここでは東海岸地域に対する青銅器時代編年案を設定して、墳墓の変遷様相について調べてみることにしよう。

筆者の東海岸地域青銅器時代編年案（朴栄九 2009 を一部修正）は次のとおりである。早期は方形住居址に石床囲石式炉址、刻目突帯文土器が出土する慶州忠孝洞 2・23 号、江陵校洞 1 号が該当する。

前期は長方形、方形、細長方形住居址に囲石式炉址、無施設式炉址、二段柄式石剣、三角湾入鏃、二段（一段）茎鏃が出土する。前期前葉は二重口縁土器（短斜線、鋸歯文）が盛行する高城泗川里、襄陽臨湖亭里、突帯文土器十二重口縁土器が出土する慶州忠孝洞 3 号、慶州金丈里（聖林文化財研究院），蔚山泉谷洞、九英里が該当する。

表 5. 東海岸地域青銅器時代墳墓調査現況

地域	支石墓	石棺墓	石槨墓	土壙墓	周溝墓	墓域支石墓	周溝型遺構
嶺東地域	5	10		1			
盈德地域	13						
浦項地域	2	6		1	1		2
慶州地域	6	11	5	2		1	8
蔚山地域	7	13		6	4	4	39
合計	33	40	5	10	5	5	49

前期中葉は可楽洞式、欣岩里式土器が盛行する嶺東地域の朝陽洞段階、南部東海岸地域1期（二重口縁土器要素盛行）に該当し、前期後葉は駅三洞式土器が盛行し嶺東地域の坊内里段階、南部東海岸地域2期（二重口縁土器要素の消滅）に該当する。

中期は長方形、方形住居址（蔚山式住居址）、無施設式炉址、一段茎式石鏃、一体型石鏃が出土する。

中期前半は嶺東地域では孔列文土器が出土する浦月里段階、南部東海岸地域は検丹里式土器（粒文、把手付土器）が登場する。中期後半には嶺東地域では無文土器壺が南部東海岸地域は横線文、把手付土器が出土する。

粘土帯土器段階である青銅器時代後期は隅丸長方形、隅丸方形、方形、長方形住居址と無施設式炉址が確認され、円形粘土帯土器、無文土器壺、一体型石鏃、三角形石鏃が出土する。

1．地域別墳墓の変遷様相

1）嶺東地域

嶺東地域の青銅器時代墳墓は支石墓、石棺墓、土壙墓に区分される。嶺東地域の青銅器時代前期段階は無茎式石鏃、二段茎式石鏃、二段柄式石剣、台付小壺などで定義されるが、松田里の土壙墓、坊内里の石棺墓は前期中葉に編年され、まだ前期前葉に該当する墳墓は確認されていない。前期中半段階は嶺東地域の土器編年を根拠にするとB.C.10世紀頃に編年される。

嶺東地域で襄陽浦月里遺跡と高城大垈里[21]5号住居址など単純孔列文土器の遺物構成を見せる段階が中期に編年され、墳墓としては浦月里支石墓、大垈里支石墓がこの段階にあたる。

青銅器時代後期の墳墓で朝陽洞1・2号支石墓の時期を円形粘土帯土器段階に編年することには同感するが[22]、細形銅剣文化期（B.C.400～300）よりは古い段階である嶺東地域粘土帯土器前期1期段階（朴栄九2010）である紀元前5世紀頃（李亨源の編年では琵琶形銅剣段階（B.C.500～400年））に編年することにしよう。東草朝陽洞支石墓は青銅器時代中期に編年される浦月里支石墓と同様に下部構造が石槨型である。

したがって東草朝陽洞支石墓は嶺東地域の円形粘土帯土器1期段階から以前の土着勢力[23]の墳墓を継承したものと判断される。嶺東地域における円形粘土帯土器段階の墳墓の大部分は高城松峴里と江陵芳洞里で見られるように石棺墓で違いを見せている。松峴里石棺墓と芳洞里石棺墓とともに円形粘土帯土器集落と関連する石棺墓がこの段階に該当すると考える。江原地域における円形粘土帯土器の時期をB.C.5～3世紀頃と見るために後期の墳墓も同じ時期に編年できる。

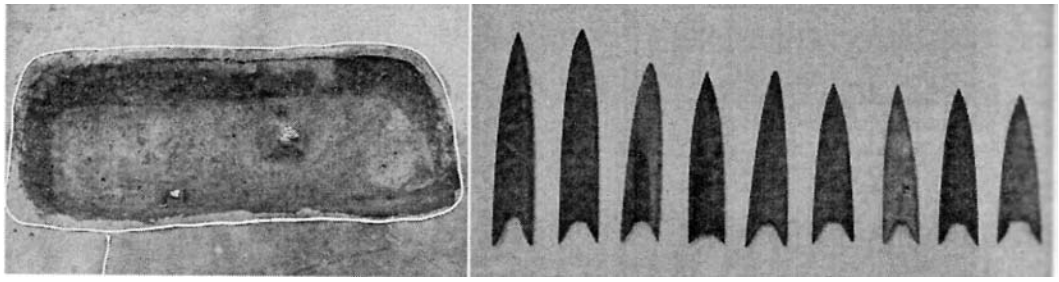


写真 4. 襄陽松田里土壙墓と出土遺物

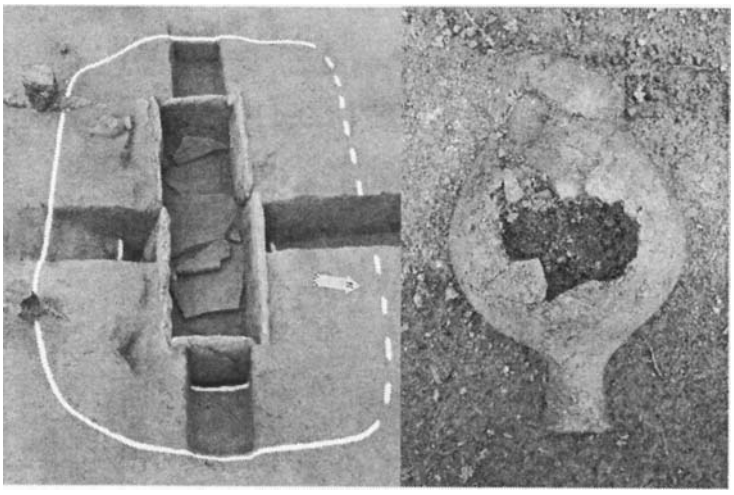


写真 5. 江陵坊内里石棺墓と出土遺物

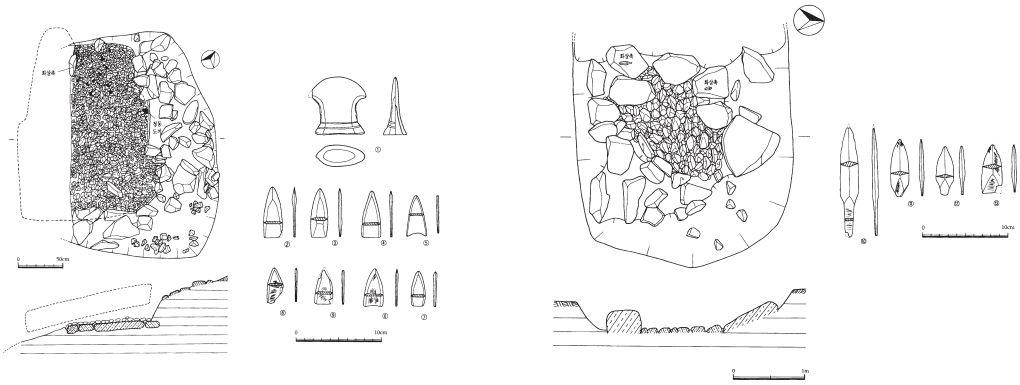


図 3. 束草朝陽洞 1・2 号支石墓と出土遺物

2）南部東海岸地域

南部東海岸地域はそれぞれ盈徳地域、浦項地域、慶州地域、蔚山地域に細分して調べてみよう。

盈徳地域では南山里で 2 基、羽谷里で 11 基が調査された。地上型の囲石型石棺と埋葬施設が確認されない形態に区分される。出土遺物がなく正確な時期は不明であるが、蔚山地

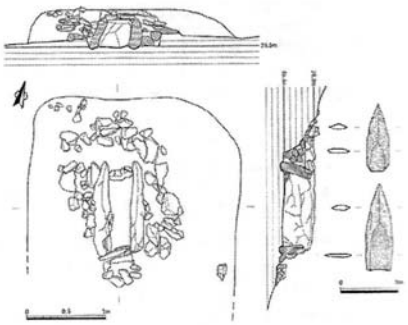
類型	遺跡
Ⅰ	 高城 松峴里 B-13 号 高城 松峴里 D-1 号 高城 松峴里 D-2 号
Ⅱ	 高城 松峴里 D-1 号 高城 草島里 1 号 江陵 芳洞里 C-1 号 高城 草島里 2 号

図 4. 嶺東地域における粘土帯土器段階の石棺墓

域と同じ検丹里型分布圏地域の墳墓（李秀鴻 2011）と判断され中期後半に編年できる。

浦項地域では馬山里石棺墓で三角湾入石鏃と磨製石剣が出土し、虎洞周溝墓出土口唇刻目短斜線土器と三政里土壙墓出土赤色磨研土器[24]などは筆者が編年した浦項地域2期で前期後葉に編年される。

院洞2地区支石墓で出土した石槍は鶴川里4号石棺墓から出土した石槍と類似する。鶴川里石棺墓4号では磨製石槍、石鑿、剣把頭飾（江陵松林里1号と類似）が出土し、5号剣把頭飾は高城松峴里D出土品と類似する点から院洞2地区支石墓と鶴川里石棺墓は共に円形粘土帯土器段階である青銅器時代後期の墳墓と判断される。

慶州地域では慶州忠孝洞と金丈里で刻目突帯文土器住居址が見られる早期から前期前葉に該当する墳墓は確認されていない。前期中葉に該当する慶州汶山里Ⅱカ−2号と月山里山137−1番地石棺墓があり、中期に該当する墳墓は徳泉里石棺墓とⅡ−カ3号石槨墓であり、後期に該当する墳墓はまだ調査例がない。

蔚山地域（李秀鴻 2007、黄昌漢　2010）では支石墓、石棺墓、土壙墓、周溝墓、墓域支石墓、周溝型遺構が調査された。蔚山九英里、泉谷洞遺跡のような前期前葉に編年される時期の墳墓は確認されておらず、蔚山地域で調査された青銅器時代墳墓の中で最も古い遺構は屈火里Ⅱ−2号土壙墓である。

周溝墓は長方形のものが中山洞薬水遺跡で1基、泉谷洞117番地遺跡2基、方形は東川里遺跡で1基調査された。石棺墓は早日里遺跡72号、校洞里スナム遺跡の割石石棺墓から赤色磨研土器と二段柄式石剣、一段茎式石鏃が出土しており前期後半、徳新里572−6番地石棺墓では新しい段階の磨研土器が出土しており中期後半に該当する。支石墓は検丹里遺跡2基、中山洞715−1遺跡2基、徳新里572−6番地1基、上蓮岩Ⅲ−1号など6基が調査されている。墓域支石墓は蔚州吉川一般産業団地2次（1段階）造成事業敷地内遺跡で4基が調査されたが、平面形態は長方形（1・2号）と楕円形（3号）に区分される。周溝型遺構は蔚山山下地区で39基が調査された。平面形態は

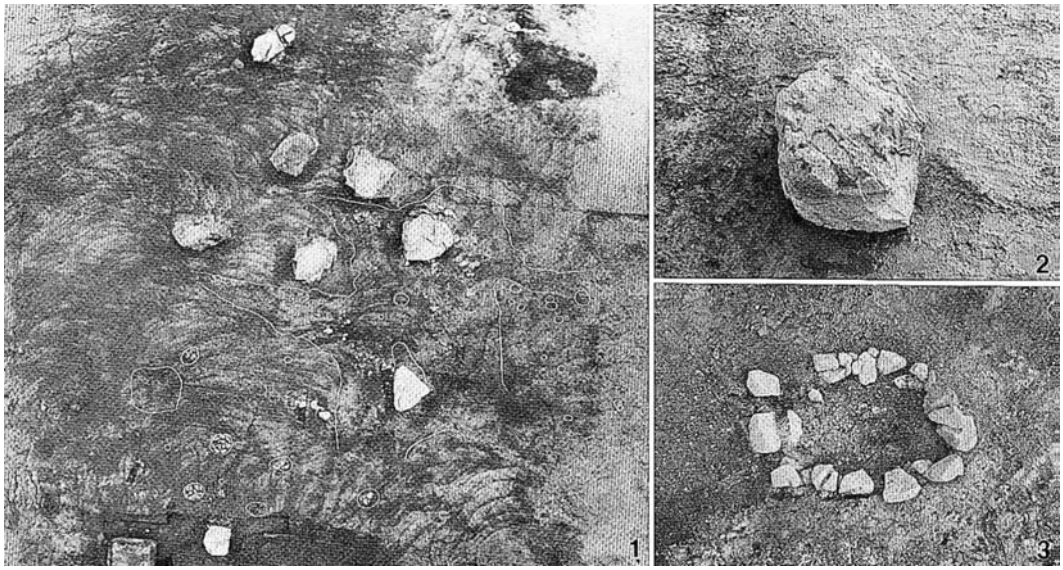
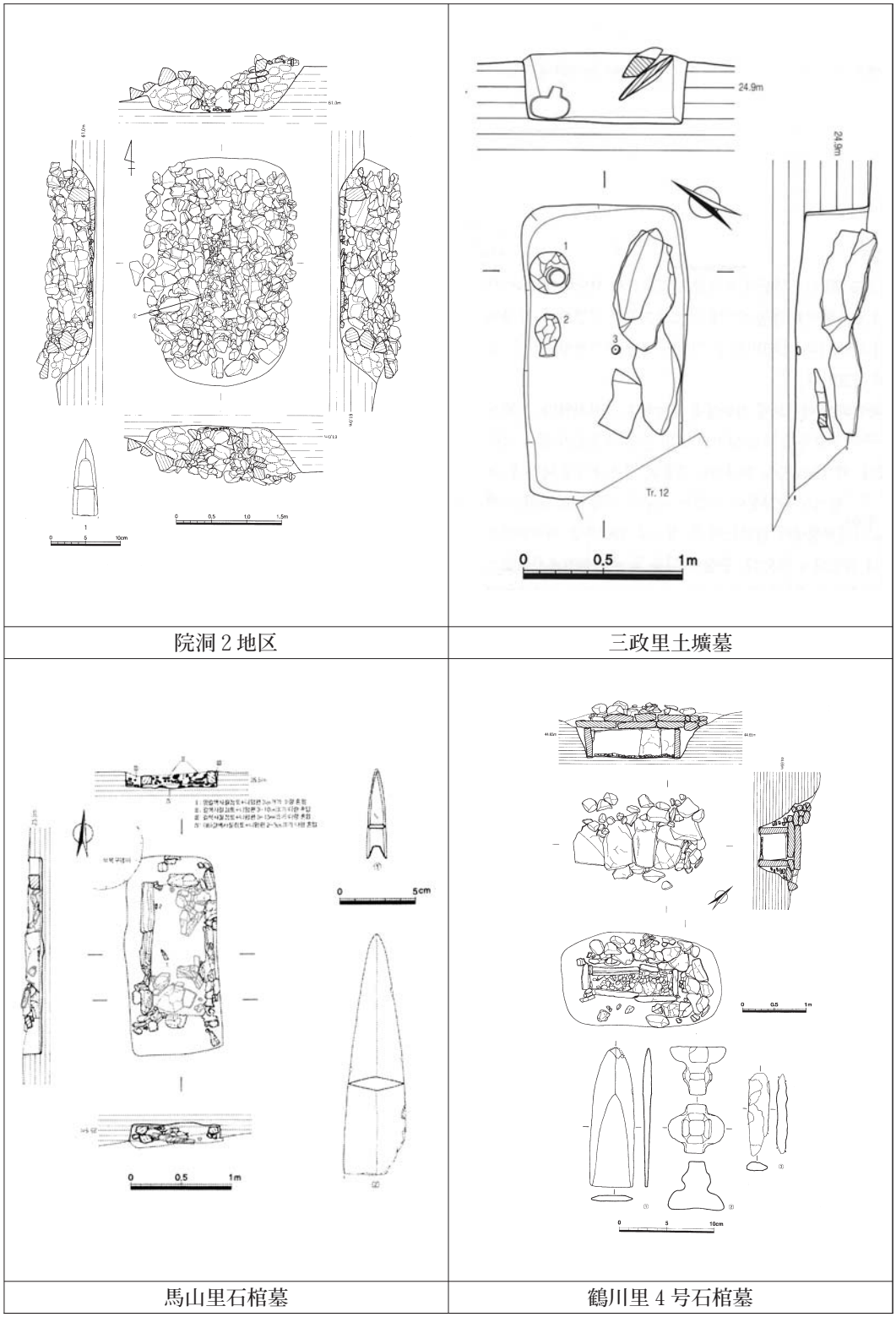
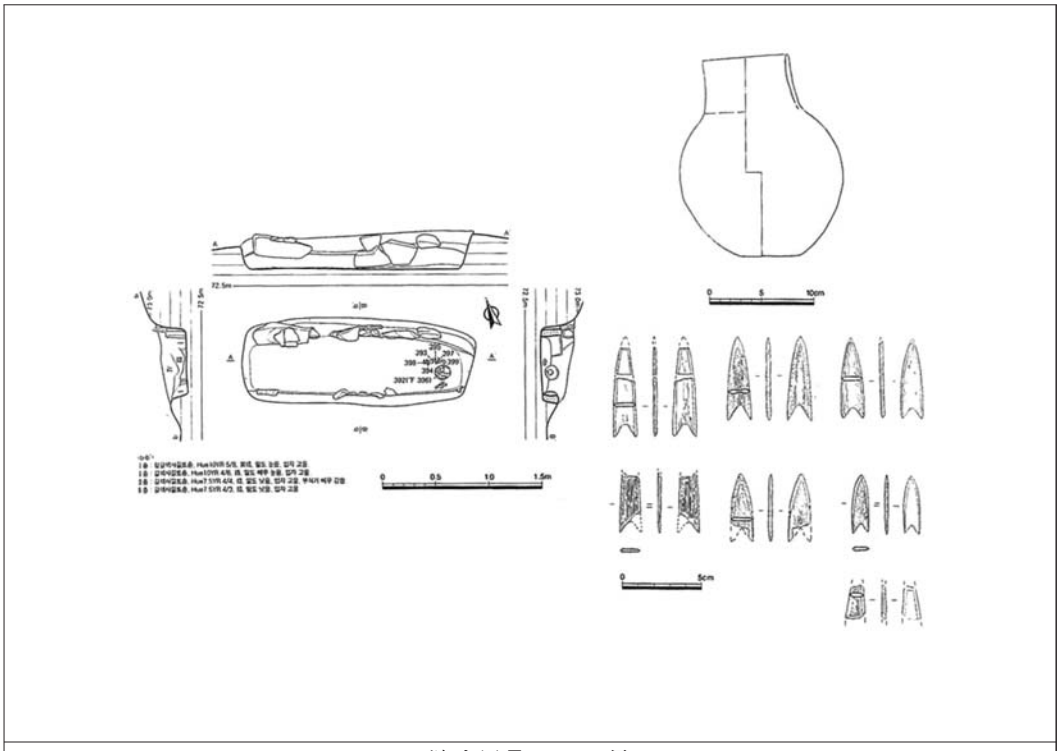


写真6. 慶北盈徳郡羽谷里212−3番地支石墓

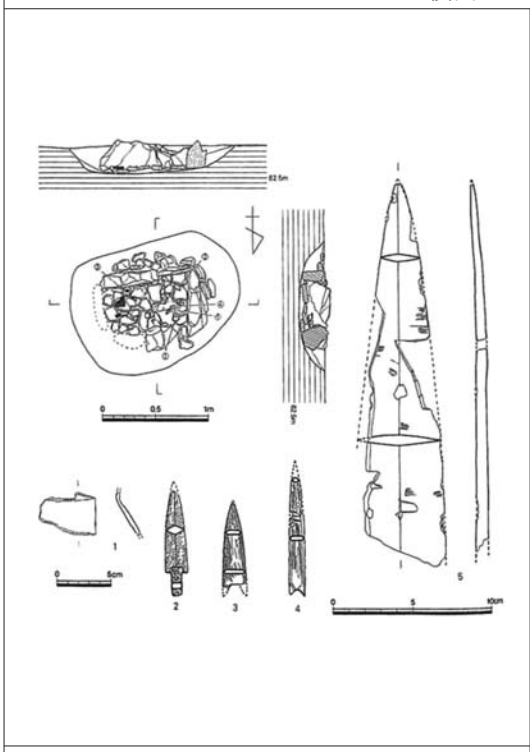


院洞２地区	三政里土壙墓
馬山里石棺墓	鶴川里４号石棺墓

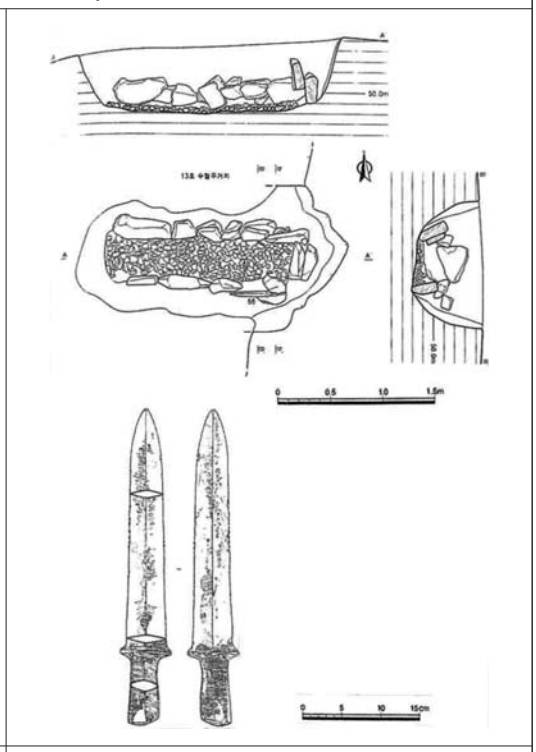
図 5. 浦項地域の墳墓及び出土遺物



汶山里Ⅱ　ナ－2 号



徳泉里 1 号



汶山里Ⅱ　カ－3 号

図 6.　慶州地域の墳墓及び出土遺物

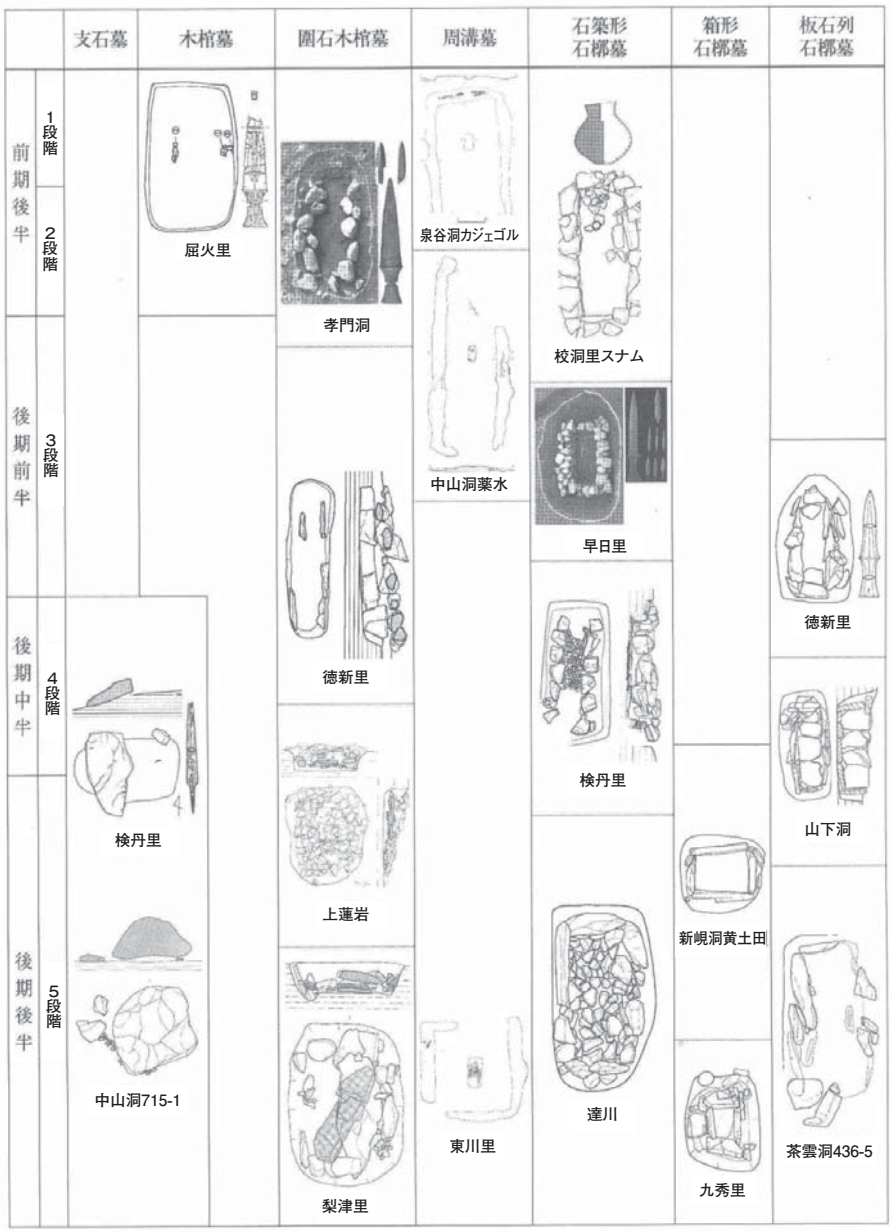


図 7. 蔚山地域における墳墓編年図（黄昌漢 2010 から引用）

隅丸長方形、隅丸方形に区分される。

2. 東海岸地域における青銅器時代墳墓の変遷様相

青銅器時代墳墓の分布様相は前期～後期まで集落内から独立した形態を見せる。東海岸地域における青銅器時代墳墓の中で最初に登場する墳墓は土壙墓である。襄陽松田里土壙墓、蔚山屈火里土壙墓出土三角湾入石鏃、有樋二段柄式石剣は前期中葉に編年される。裵眞晟は朝鮮半島南部地域の前期墳墓は土壙墓、石棺墓、支石墓、周溝墓に区分され、時期は

前期後半に属するとした（裵眞晟 2011）。筆者は江原地域の石槨墓に分類された洪川哲亭里、旌善アウラジ、外三浦里石槨墓出土三角湾入石鏃と二段茎石鏃などと襄陽松田里土壙墓出土三角湾入石鏃は前期中葉に編年でき、朝鮮半島南部地域における青銅器時代墳墓の出現を青銅器時代前期中葉と見ることにしよう。一方、李亨源は洪川外三浦里石槨墓について突帯文土器が出土する3号、5号住居址を磨製石剣の共伴様相からみて前期前半[25]に編年し、石槨墓も同じ段階の墳墓と把握した（李亨源 2011）。浦項三政里土壙墓では赤色磨研土器と紡錘車、蔚山孝門洞（モジュール化産業団地）では二段柄式石剣と一段茎式石鏃が出土しており前期後葉に編年される。

土壙墓は嶺東地域で1基、南部東海岸地域で9基など調査例が少なく、青銅器時代前期の墳墓として代表性を持つ墳墓型式と見るには資料が限定的である。

石棺墓は土壙墓と同様に前期中葉に登場して円形粘土帯土器段階である後期まで小型の石棺の形態で持続的に築造される。坊内里石棺墓出土台付小壺は江陵校洞1号出土品と束草朝陽洞3号品の中間形態で前期中葉に編年される。慶州汶山里Ⅱカ−2号と月山里山137−1番地石棺墓出土三角湾入石鏃は浦項地域の草谷里2号住居址、南松里3号住居址出土品と類似しており青銅器時代前期中葉に編年され、蔚山早日里遺跡72号、校洞里スナム遺跡の割石石棺墓で赤色磨研土器と二段柄式石剣、一段茎式石鏃が出土し、浦項馬山里出土三角湾入石鏃は慶州馬山里三角湾入石鏃より新しい前期後葉に編年される。慶州徳泉里では赤色磨研土器片1点、磨製石剣、一段茎式石鏃、三角湾入石鏃、身部が細長い三角湾入石鏃などの遺物構成を見ると、嶺東地域の浦月里1号住居址出土品のように中期前半に編年される。松峴里B遺跡を含む嶺東地域の石棺墓と浦項鶴川里石棺墓が円形粘土帯土器段階に該当し、遺物は磨製石剣、石鑿、剣把頭飾などが出土する。

石槨墓は慶州地域の汶山里遺跡でのみ確認される。汶山里Ⅱカ−2号石棺墓では赤色磨研土器の環状把手[26]が出土し、汶山里Ⅱカ−13号住居址では退化した欣岩里式土器が出土しており前期後葉に編年され、住居址を切って後代に築造されたⅡ−カ3号石槨墓では一段柄式石剣1点が出土しているが、これは大邱上仁洞1号石槨墓出土品と類似しており中期後半に編年される。

周溝墓は浦項院洞で細長方形周溝墓1基、長方形は蔚山中山洞薬水遺跡で1基、泉谷洞117番地遺跡2基、方形は蔚山東川里遺跡で1基調査された。（細）長方形周溝墓は前期後葉に、方形は前期後半〜中期前半に編年される。蔚山地域の周溝墓は長方形から方形に変化し、埋葬主体部は土壙（木棺）の構造を持つことが特徴である。

支石墓は青銅器時代中期に登場するが、嶺東地域の浦月里遺跡で調査された支石墓2基と大垈里遺跡で調査された支石墓1基は中期の墳墓に編年される。一方、蔚山地域で調査された支石墓を見ると検丹里は地下式、中山洞715−1番地は地上式で埋葬主体部は囲石型石棺の形態を見せる検丹里類型の代表的な墳墓と把握されており、慶州汶山里Ⅱナ区域支石墓も同時期の墳墓と判断される。一方、朝陽洞1・2号支石墓と浦項院洞2地区Ⅳ−1区域支石墓、蔚山上蓮岩Ⅲ−1号は地下式の石槨型でそれぞれ扇形銅斧と無茎式石鏃、磨製石槍片1点が出土し、青銅器時代後期である円形粘土帯土器段階に築造された墳墓と判断される。

墓域支石墓の平面形態は細長方形（慶州錫

杖洞)、蔚州吉川一般産業団地２次（1段階）造成事業敷地内遺跡は長方形（1・2号）と楕円形（3号）に区分される。磨製石剣と一段式石鏃が出土しており中期後半に編年される。

周溝型遺構は周溝墓と判断されており（李秀鴻2010)、平面形態は隅丸長方形、隅丸方形で最近、蔚山山下洞遺跡と慶州漁日里遺跡など東海岸に接した遺跡を中心に調査例が増加している。蔚山山下洞１号周溝型遺構は１号住居址を破壊して造成、4号では横線文、9号では孔列文と短斜線（粒文）が出土し、検丹里類型の時期である中期後半の埋葬関連遺構である。

一方、最近浦項虎洞Ⅱ－29号住居址と慶州千軍洞５号住居址で確認された人骨を基に家屋葬の存在が提起されている（兪炳琭2010)。また、蔚山式住居址で多く確認される火災住居址の中で住居址内に積石されたものを家屋葬の火葬行為と把握している（李秀鴻2011)。浦項虎洞遺跡と千軍洞遺跡の小規模周辺集落はたとえ伝統的な葬制であるとしても拠点集落の影響を受け、それによって区画墓や支石墓を採用できず被葬者の生の延長として死後世界を家屋に再現したもので生前の住居を死後の墳墓と同一視する社会的観念の中で家屋葬が執り行われたものと把握している（安在皓2011)。しかし、浦項虎洞遺跡は筆者が区分した浦項冷川周辺集落の中では住居址が多く確認された大規模集落（52棟）と把握され、隣接するⅠ地区では前期後葉に編年される周溝墓が確認されており、Ⅱ地区のような丘陵内で中期前半に編年される家屋葬（29号住居址）と周溝型遺構（3基―1・2号、4号溝状遺構）が確認されている。また、浦項地域では虎洞遺跡を除いては他の遺跡では周溝墓あるいは周溝型遺構や家屋葬が確認されていない。

以上で東海岸地域青銅器時代墳墓の変遷について調べてみた。以下では周辺地域の墳墓に対する比較及び検討を試みる。

青銅器時代の江原地域では支石墓、石棺墓、石槨墓、周溝墓、土壙墓など多様な墓制が確認される。また同じ江原地域の中でも墳墓の立地や分布、型式と構造、出土遺物において相当な地域差を見せているが、特に嶺東と嶺西地域は明確な対比を見せている。多様な墓制の中で最も幅広い分布を見せるものは支石墓と石棺墓である。実際、石槨墓は蓋石式支石墓の下部構造として築造されたものが上石が流失した結果、石槨墓として扱われた可能性が高く、別途の墓制として認めにくい点がある。

嶺東地域を含む江原地域の支石墓は大型の墓域と地下埋葬施設を持つ南方式支石墓や巨大な上石を持つ北方式支石墓のどちらにも発達しない点は中西部地方との共通点と言える。嶺東地域を含む江原地域の支石墓は埋葬施設を地下に置く蓋石式と地上にある北方式つまり卓子式が共存しており、南方式つまり基盤式はほとんど発見されていない。このような様相は北方式支石墓と南方式支石墓がそれぞれ発達した南北両地域の漸移地帯である中部地域の共通点と判断される（李盛周・朴栄九2009)。支石墓の構造的な変化について埋葬施設が地下にある蓋石式から地上にある型式に変化する方向と積石墓域を持つものから持たない北方式に近い構造への変化が指摘されている（鄭然雨2005)。

江原嶺西地域は土壙墓、支石墓、石槨墓、石棺墓、周溝墓などで墓の種類は類似するが、東海岸に比べ相対的に調査された墳墓が多い。前期に石槨墓、周溝墓が該当し、過渡期には牛頭洞石棺墓、中期には支石墓、石棺墓、土壙墓、後期には中島２号支石墓で粘土帯土器が出土しており、支石墓の一部が粘土帯土器

表 6. 東海岸地域青銅器時代墳墓の編年

時期	支石墓	石棺墓	石槨墓	土壙墓	周溝墓	墓域支石墓	周溝型遺構
前期中半		江陵坊内里，慶州汶山里Ⅱナ−2号，慶州月山里 137−1		襄陽松田里，蔚山屈火里			
前期後半		浦項馬山里，蔚山早日里，慶州汶山里Ⅱナ−2号，蔚山校洞里スナム		浦項三政里，蔚山孝門洞（大東）	浦項虎洞Ⅰ，蔚山泉谷洞・中山洞薬水		
中期前半	襄陽浦月里，高城大垈里，慶州汶山里Ⅱナ区域	慶州徳泉里，慶州汶山里Ⅱカ−3号		慶州東山里	蔚山東川里	浦項虎洞Ⅱ	
中期後半		蔚山徳新里572−6	慶州徳泉里，慶州汶山里Ⅱカ−3号	蔚山徳新里572−6	慶州錫杖洞，蔚山吉川産業団地	蔚山山下地区	
後期	朝陽洞1・2号，浦項院洞 2 地区Ⅳ−1区域，上蓮岩Ⅲ−1号	高城松峴里・草島里，江陵芳洞里，浦項鶴川里					

段階まで持続している（金権中 2007）。

嶺西地域の墳墓の中で特徴的なものは周溝墓であるといえるが時期的に前期後葉と中期の前半に限定して流行した。埋葬施設の規模は小さな石棺に過ぎないが、方形あるいは細長方形に区画された墓域はかなり大規模でまたこれらが連接して分布することで大規模な墓域空間を確保している。細長方形、方形あるいは長方形の墓域を持つ南部地方の区画墓とは基本的なモチーフが同じであると見られる。

京畿地域の墳墓の種類は支石墓、石棺墓、小型箱形石棺墓等であり、朝鮮半島南部地域で卓子式支石墓が最も多く分布している地域である。支石墓は青銅器時代後期に消滅して、積石木棺墓と木棺墓に交替した。

東海岸地域では前期中葉に土壙墓と石棺墓が出現して、嶺西地域には石槨墓と周溝墓が出現する。両地域ともに早期と前期前葉に該当する墳墓は確認されていない。嶺西地域の土壙墓は龍岩里遺跡（12 基）で見られ、泉田里類型に該当する中期に編年される。支石墓は中期に盛行する墓制として東海岸地域と嶺西地域ともに円形粘土帯段階まで部分的に存続したのち消滅して、京畿地域では積石木棺墓と木棺墓に交替する。

東海岸地域では朝鮮半島南部地域の他地域と同様に青銅器時代早期つまり突帯文土器段階に属する墳墓はまだ確認されておらず、青銅器時代前期の墳墓が間欠的に発掘されているが、調査された住居址の数に比べ墳墓空間の造成が非常に微弱である（李亨源 2011）[27]。一方、蔚山地域に墳墓が少ない理由は墳墓を造営できる階層が少なかった可能性と現在の一般的な立地より特殊な場所に埋葬した可能性が提示されている（黄昌漢 2010）。李秀鴻は地上式あるいは浅い竪穴式構造が削平された可能性と家屋葬と関連して住居址内に積石された火災住居址が一部墳墓に転用された可能性を提示しながら、二つの可能性とも火葬や風葬、洗骨葬といった二次葬の葬法が原因になるとした（李秀鴻 2011）。

東海岸地域青銅器時代墳墓の分布様相は前期～後期まで集落内で独立した形態で分布する。最近、大邱、慶南、湖南地域で調査例が増加している墓域支石墓が一部確認されているが、青銅剣、玉などの副葬遺物などは確認されていない。このような原因は東海岸地域が青銅器時代前期の伝統が持続する中で松菊里文化の不在による地域性と密接な関連性があるものと解釈できる（黄昌漢2010）。また、東海岸地域は広い沖積地が形成されていないという地理的特性によって稲作文化が盛行せず大規模集落を形成する地形的な空間、つまり個別丘陵の規模が小さい関係で単一集落の規模が小さくならざるをえない。したがって農耕社会で葬送儀礼が社会的位置や身分を示すこと以外に集団の結束を強化しようとする目的も同時にあったという意見（李相吉2000）を考慮すると、蔚山地域を含む東海岸地域はこのような集団の結束（農耕文化）を物語る墳墓の築造及び墳墓を造営できる階層が少ないことによる社会的位置や身分をあらわすための大型区画墓の築造が相対的に不必要であったものという理解（黄昌漢2010）に同感する。

Ⅴ．結論

以上の内容を整理して結論としたい。

東海岸地域における青銅器時代墳墓として支石墓、石棺墓、石槨墓、周溝墓、土壙墓、墓域支石墓、周溝型遺構など多様な墳墓が確認される。しかし、朝鮮半島南部地域の他地域と同様に青銅器時代早期つまり突帯文土器段階に属する墳墓はまだ確認されていない。また、調査された集落内の住居址の数に比べて墳墓の調査事例は極めて少ない。

東海岸地域における青銅器時代墳墓は大部分低い丘陵に立地し、一部沖積台地で確認されるが集落の立地傾向と大同小異な様相を見せている。嶺東地域の襄陽松田里で発見された土壙墓は砂丘地帯に位置しており、このような立地は極めて例外的であるといえる。

東海岸地域青銅器時代墳墓の中で最初に登場するのは土壙墓である。しかし調査例が少なく東海岸地域青銅器時代前期の墳墓として代表性を持つ墳墓型式と見るには資料的限界がある。

石棺墓は東海岸地域で最も多く調査された墳墓である。土壙墓と同様に前期中葉に登場して円形粘土帯土器段階である青銅器時代後期まで小型石棺の形態で持続的に築造される。

石槨墓は慶州地域の汶山里遺跡でのみ確認されている。遺物は一段柄式石剣１点が出土しており青銅器時代中期後半に編年される。

周溝墓は細長（長）方形のものが前期後葉、方形は前期後葉～中期前半に編年される。蔚山地域の周溝墓は長方形から方形に変化して、埋葬主体部は土壙（木棺）の構造を持つことが特徴である。

支石墓は東海岸地域で最も多く分布している墳墓であるが、実際に発掘調査された支石墓は少なく正確な時期設定が難しい状況であるが、東海岸地域に支石墓が導入・築造された時点は他地域と類似するものと判断される。墓域施設が確認されておらず独立的な分布様相を見せ、南部東海岸地域の検丹里文化圏では地上式の囲石型石棺の構造を呈する特徴を見せている。支石墓の登場時点は青銅器時代中期であり、東草朝陽洞１・２号支石墓と浦項院洞２地区Ⅳ－１区域支石墓、蔚山上蓮岩Ⅲ－１号は青銅器時代後期の円形粘土帯土器段階に築造された墳墓である。

東海岸地域の支石墓は築造規模や形態などからみて自主的な発展様相は不完全であり他地域と同様に粘土帯土器段階まで存続したのち消滅してしまったものと判断される。

近年、慶州と蔚山地域で墓域支石墓が確認されており、慶尚南道地域の墓域支石墓との比較検討が行わなければならず、蔚山山下洞遺跡と慶州漁日里遺跡など海岸に接して位置する遺跡を中心に調査例が増加している周溝型遺構は周溝墓のような墳墓と判断されるが、その性格究明はさらなる正確な資料増加を待って追加的な検討が必要なものと判断される。

参考文献（カナダラ順）

高旻廷 2011「嶺南地域青銅器時代墳墓の最新調査成果」『墳墓を通してみた青銅器時代社会と文化』韓国青銅器学会

高東淳 1993『嶺東地方の支石墓に関する考察』関東大学校大学院碩士学位論文

金廣明 2003「慶北地域の支石墓」『支石墓調査の新たな成果』韓国上古史学会

金権中 2007「江原地域青銅器時代墳墓とコインドル」『アジア巨石文化とコインドル』北東アジア支石墓研究所

金権中 2008「青銅器時代周溝墓の検討」『韓国青銅器学報』第 3 号　韓国青銅器学会

金圭鎬 2010『江原地域のコインドル研究』江原大学校大学院博士学位論文

董眞淑 2003『嶺南地方青銅器時代文化の変遷』慶北大学校文学碩士学位論文

閔善禮 2007「慶北地域青銅器時代墳墓とコインドル」『アジア巨石文化とコインドル』北東アジア支石墓研究所

裵眞晟 2010「青銅器時代の蔚山と豆満江流域」『青銅器時代の蔚山太和江文化』蔚山文化財研究院

裵眞晟 2011「墳墓築造社会の開始」『韓国考古学報』80　韓国考古学会

孫ホソン・全サンウク 2010「青銅器時代住居址研究ー慶州圏域住居址の分類と時期設定ー」『聖林考古論叢』聖林文化財研究院

安在皓 2011「墓域式支石墓の出現と社会相ー韓半島南部の青銅器時代生業と墓葬の地域相ー」『東北亜青銅器文化と支石墓』韓国学中央研究院

兪炳琭2010「竪穴建物廃棄行為研究 1ー家屋葬ー」『釜山大学校考古学科創設 20 周年記念論文集』釜山大学校考古学科

尹昊弼 2009「青銅器時代墓域支石墓に関する研究」『慶南研究』第 1 号　慶南発展研究院歴史文化センター

李盛周・朴栄九 2009「江原地域の青銅器時代墓制」『巨済大錦里遺跡考察編』慶南考古学研究所

李亨源 2010「中部地域粘土帯土器文化の時間性と空間性」『湖西考古学』24　湖西考古学会

李亨源 2011「青銅器時代墳墓空間造成の多様性検討」『墓を通してみた青銅器時代社会と文化』韓国青銅器学会

朴栄九 2007「嶺東地域青銅器時代集落構造」『古文化』69 集　韓国大学博物館協会

朴栄九 2009「南部東海岸地域無文土器文化の展開様相ー浦項地域を中心にー」『嶺南考古学』51　嶺南考古学会

朴栄九 2010「嶺東地域円形粘土帯文化の展開様相」『日韓集落研究の新しい視角を求めてⅡ』日韓集落研究会

朴栄九 2011「南部東海岸地域青銅器時代聚落」『日韓聚落研究の展開』日韓聚落研究会

白弘基・高東淳・朴栄九・崔英姫 2000『東草朝陽洞住居址』江陵大学校博物館

李相吉 2000『青銅器時代儀礼に関する考古学的研究』大邱カトリック大学校大学院博士学位論文

李盛周 1999「支石墓：農耕社会の記念物」崔夢龍ほか編『韓国支石墓（コインドル）遺

跡総合調査・研究』文化財庁・ソウル大学博物館
李秀鴻 2010「蔚山地域青銅器時代周溝形遺構について」『釜山大学校考古学科創設 20 周年記念論文集』釜山大学校考古学科
李秀鴻 2011「検丹里類型の墳墓に対する研究」『考古広場』8　釜山考古学研究会
鄭然雨 2005「江原地域の墳墓と祭祀」『江原地域の青銅器文化』江原考古学会
黄昌漢 2010「蔚山地域青銅器時代墓制の特徴」『青銅器時代の蔚山太和江文化』蔚山文化財研究院
黄炫眞 2004『嶺南地域の無文土器時代地域性研究』釜山大学校文学碩士学位論文
江陵大学校博物館 2002『襄陽浦月里住居址』
江原考古文化研究院 2010『高城猪津里遺跡』
江原文化財研究所 2007『高城松峴里遺跡』
江原文化財研究所 2007『江陵芳洞里遺跡』
江原文化財研究所 2007『江陵坊内里家畜衛生処理場新築敷地内遺跡発掘調査指導委員会会議資料』
慶尚北道文化財研究院 2002『浦項鶴川里遺跡発掘調査報告書』
慶尚北道文化財研究院 2005『浦項馬山里古墳群』
慶尚北道文化財研究院 2006『浦項南松里遺跡』
慶尚北道文化財研究院 2006『慶州甲山里遺跡』
慶尚北道文化財研究院 2007『浦項三政 1 里遺跡』
慶尚北道文化財研究院 2009『浦項江沙里遺跡Ⅱ』
鶏林文化財研究院 2010『慶州錫杖洞 876－5 番地多世帯住宅新築敷地内遺跡文化財発掘調査略報告書』
聖林文化財研究院 2010『慶州汶山里青銅器時代遺跡－Ⅱ区域－』
蔚山発展研究院文化財センター 2009『蔚山山下洞遺跡』
蔚山発展研究院文化財センター 2011『蔚州徳新里 572－6 遺跡』
嶺南文化財研究院 2005『慶州奉吉里遺跡』
嶺南文化財研究院 2006『慶州月山里山 137－1 番地遺跡』
嶺南文化財研究院 2008『慶州徳泉里遺跡Ⅰ－青銅器時代－』

（原文：朴栄九 2011「東海岸地域青銅器時代墳墓の変遷」『韓国青銅器学報』9 号　韓国青銅器学会 pp. 62－94）

翻訳作業において朴栄九氏、金耿里氏から援助を頂いた。末尾ながら感謝いたします。

---

(1) 既存の研究では嶺南東海岸地域（董眞淑 2003）、東南海岸地域（黄炫眞 2004）、兄山江流域・太和江流域・東海岸地域（金権九 2005）に区分されてきたが、筆者は江原嶺東地域を中部東海岸地域に、慶尚北道蔚珍郡－浦項市－慶州市－蔚山広域市に至る地域を南部東海岸地域に区分した（朴栄九 2009）。

(2) 嶺東地域と東南海岸地域に豆満江流域の影響があらわれる時期とその対象には違いがあり、嶺東地域には前期前半に蔚山地域には前期後半にあらわれるとし、嘴形石器は東海岸を通したルートだけでなく内陸を通したルートも想定されるとし、嶺東地域と東南海岸地域は東北地域との関連性で共通点と共に差異点もあるとみた（裵眞晟 2010）。

(3) 中期は長方形、方形住居址（蔚山式住居址）、無施設式炉址、一段茎式石鏃、一体型石鏃が出土する。中期前半は嶺東地域

では孔列文土器が出土する浦月里段階、南部東海岸地域は検丹里式土器（粒文、把手付土器）が登場する。中期後半には嶺東地域では無文土器壺が、南部東海岸地域では横線文、把手付土器が出土する。

(4) 慶州金丈里遺跡、徳泉里遺跡（嶺文研）、隍城洞遺跡が代表的である。

(5) 嶺西地域では支石墓の92%が河川沿いの沖積台地や平野地帯に位置する一方、嶺東では支石墓の96%が丘陵地帯や山麓に位置する（金圭鎬2010）。

(6) 浦項市には約350基の支石墓が分布すると報告されている（金廣明2003）。

(7) 慶州市には約370基の支石墓が分布すると報告されている（金廣明2003）。

(8) この型式分類によると、支石墓の属性の中で最も重要な分類基準とされたのは「墓室の位置」であった。地下型（Ⅰ型）、地上に墓室が築造されたものを地上型（Ⅱ型）に大別し、積石の有無、埋葬主体部の型式によって区分した。さらに積石の有無によって積石があるもの（a型）とないもの（b型）に、埋葬施設の型式によって石槨型（①型）、石棺型（②型）、土壙型（③型）に細分している。

(9) 孔列文土器が地表採集された高城郡仁亭里遺物散布地も同じ丘陵内で支石墓2基が確認されており、今後上記の遺跡に対する調査が行われれば住居址と支石墓間の時期設定ができるものと考えられる。

(10) 南山里支石墓2基は埋葬主体部が地上に位置する囲石型石棺で床面に黒色粘土を敷いた後、直径5cmほどの礫を敷いて屍床とした。

(11) 李秀鴻は床面に割石や板石を屍床として敷き、内部に割石は存在するものの壁石とするには粗雑に積まれていることから木棺や他の屍床の存在を類推できる墳墓と把握している（李秀鴻2011）。

(12) 支石墓の構造は上石、埋葬施設、敷石施設で構成される。しかし支石墓を調査すると上石の下で埋葬施設のみ確認される場合と敷石施設のみ確認される場合があり、支石墓の上石を除くと埋葬施設は石棺・石槨墓と形態上の違いがない（閔善禮2007）。

(13) 嶺西地域では南漢江流域の旌善アウラジ遺跡、北漢江流域の洪川外三浦里遺跡、哲亭里Ⅱ遺跡でそれぞれ1基ずつ調査された。アウラジ3号石槨墓は支石墓とともに分布するのに対し、外三浦里や哲亭里Ⅱ遺跡では石槨墓1基が単独で確認された。石槨墓は蓋石式支石墓の下部構造と推定されるが蓋石が確認されず、積石などの墓域施設も確認されず石槨墓に分類した。平面形態が長方形を呈し比較的深さのある地下式であり、四壁は川石を利用して7〜13段に積んだ。遺物は無茎鏃と二段茎式石鏃が主流をなし、土器は赤色磨研土器が出土し江原地域の支石墓から出土する遺物とは相当な違いを見せており時期差もあるため、支石墓の下部構造とは異なる系統の墓と見ている（鄭然雨2005、金権中2007）。

(14) 板石や割石が壁面の一部にのみあるものや壁面や底面に固定された痕跡がなく全体的な形態において定型性が落ち、壁石というよりは補強石のような機能を持つと見られる場合は木棺である可能性が高いとした（裵眞晟2011）。

(15) 朝鮮半島南部地域で発掘調査された周溝墓は16遺跡43基で江原嶺西地域6遺跡（北漢江流域の華川居礼里1基、春川泉田里16基、河中島2基、洪川哲亭里Ⅱ遺跡

9基、南漢江流域の平昌泉洞里遺跡1基、鍾岐里遺跡1基）、慶尚南東部地域4遺跡ー浦項虎洞遺跡（慶尚北道文化財研究院2005）、蔚山東川里遺跡（蔚山文化財研究院2006）、蔚山中山洞薬水遺跡（蔚山文化財研究院2007）、蔚山泉谷洞171番地遺跡（蔚山文化財研究院2007）、慶南西南部地域4遺跡ー晋州玉房8地区遺跡（国立昌原文化財研究所2003）、泗川梨琴洞遺跡（慶南考古学研究所2003）、馬山新村里遺跡（慶南発展研究院歴史文化センター2007）、山清下村里遺跡（慶南発展研究院歴史文化センター2008）、湖西地域2遺跡ー天安云田里遺跡（忠清文化財研究院2004）、舒川烏石里遺跡（忠清文化財研究院2006）である。江原嶺西地域を除いて大部分1〜3基ずつの周溝墓が確認されている（金権中2008）。

(16) 江原地域の青銅器時代墳墓の中で最も特異に発達した墳墓は周溝石棺墓であると言える。現時点では北漢江流域と南漢江流域で発見されており時期的にも前期末と中期初めに限定して流行した。埋葬施設の規模は小さな石棺に過ぎないが、方形あるいは細長方形に区画された墓域はかなり大規模で、またこれらが連接して分布することで相当広い墓域空間を確保している。このような周溝墓は細長方形、方形あるいは長方形の墓域を持つ南部地方の区画墓と基本的なモチーフが同じであると見ることができる。

(17) 埋葬主体部の周囲に墓域が造成された墳墓は積石墓、積石付式支石墓、敷石墓、区画墓、舗石墓、龍潭式支石墓、墓域式支石墓、墓域支石墓とも呼ばれている（尹昊弼2009）。

(18) 墓域を造成した墳墓は前期には朝鮮半島南部地方に周溝墓が採択されてから後期（本稿の中期）になると松菊里類型分布圏では墓域に本格的に石を主材料として利用、地下に位置する埋葬主体部、伸展葬を主埋葬方法として採択、群集して分布する舗石型支石墓に発展した一方、検丹里類型分布圏では埋葬主体部の地上化、墓域が小規模化して周溝墓の伝統が続いたと推論している（李秀鴻2010）。

(19) 報告書では環溝10基と報告されているが、3号溝状遺構は周溝型遺構と判断される。

(20) 現在、蔚山山下地区中、山下洞を除いた他の地区で調査された周溝型遺構に対する報告書が刊行されておらず正確な時期は不明であるが、検丹里段階（中期前半〜中期後半）に該当する時期に暫定的に編年する。

(21) 高城大垈里遺跡は口唇刻目孔列文土器片と無茎式石鏃などが出土しており前期後葉に編年できるが、5号住居址では孔列文土器のみが確認され中期に編年できる。

(22) 李亨源は朝陽洞支石墓出土石鏃と扇形銅斧の形態を牙山南城里や礼山東西里遺跡で出土したものと同じ型式に分類した。扇形銅斧は松菊里と類似するが、南城里と類似する型式であるため粘土帯土器段階の遺物とも時期の比定が必要であるとしながら、支石墓、扇形銅斧、一段茎式石鏃の形態から松菊里型段階により近いものと編年してから最近の論考では細形銅剣文化期（B.C.400〜300）に編年している（李亨源2010）。

(23) 嶺東地域に円形粘土帯土器が定着する段階で既存の勢力と交流、融化したものと判断される。このような点は住居址の立地様相、出土遺物（無文土器壺、孔列文土器、粘土帯土器共伴）の様相を通して

うかがい知ることができる。

(24) 朝鮮半島南部地域の墳墓に赤色磨研土器が副葬される時期は前期後半以降と比定されている（宋永鎮 2006）。

(25) 筆者は突帯文土器が出土する外三浦里 3・5 号住居址を早期と判断する。これについては別途の論考を通して言及しよう。

(26) 赤色磨研土器の把手は環状把手から青銅器時代中期に瘤状把手に変化する様相を見せる（キム・ジョン 2007）。

(27) 青銅器時代前期の農耕が稲作よりは焼畑や畑作中心に行われた場合、焼畑農耕の地力消耗による休耕期間の影響で当時の集落の同一地域に対する定住度が弱まると共に集落単位の移動は頻繁に起こったことが前期集落に墳墓空間が造成されない理由であると考えている。